

日中現代文学比較論

— 日中比較文化論の視点から (I) —

藤 田 昌 志

日中現代文学比較論 — 从日中比較文化論の观点看 (I) —

〈提綱〉

日本現代文学与中国現代文学之间有较大的差异。日本現代文学具有“超政治的”“超時代的”“個人的”的特征，与之相反，中国現代文学具有“政治的”“時代的”“社会的、集团的”的特征。在中国有这样的传统观念：伟大的政治家同时要有伟大的文学家的素质。日本現代文学以“個人的”为其特征，中国現代文学以“社会的、集团的”为其特征，这起因于有无“文以載道”这个“載道主義”。中国現代文学对日本現代文学的“自然主義”比较冷淡，这也起因于与“個人的”相比，中国“載道主義”更重视“社会的、集团的”。

キーワード：以文載道，政治的，個人的，写実主義，勸善懲惡

一、序

日本文学与中国文学の間にはかなりの相違があるように思える。改革開放以来、個人に視点を当てた小説が多く発表されるようになったとはいえ、現在の文学は措くとしても、近現代文学というカテゴリーで両文学を考えると、中国文学の主眼はやはり「社会」やその社会の「変革」にあった（ある）ように思える。「載道主義」が根底にあるのである。それに対して日本文学が描くのは個人の日常生活の中での心の移ろいや恋愛の中での心情といったものが中心であった。「雪国」がノーベル文学賞をとったと言うけれども、やはりそこに描かれているのは男女の繊細な心の動きであった。日本文学の場合、社会に対する批判や社会の現実を変革するという視点は表面に出ることはない。そうしたことを描くのは多くの場合「野暮」とされた。

そのような差異のある中国文学と日本文学も近現代という歴史の中で欧米列強の外圧の下に自らの道を模索していくことになる。同じく外圧にさらされたとき、両国の両文学はそれにどのように対応し、自らを表現していくのか、また、どのような交流、影響関係を持っていくのか、そうしたことを本稿では考察してみたいと思う。ひるがえって現在、日本にいる中国人留学生は留学生全体の60%を占めているが、日本人で中国のことを本当

に、全体的に知悉する者は果たしてどれだけのいるのであろうか。その逆もまたそうである。

本稿は、そのことに鑑み、日中比較文化論的視点から日中現代文学の比較を概括的に行い、日本人（及び日本に住む人々）の中国理解、中国人（及び日本にいる外国人）の日本理解に資することを目的としていることを付言しておく。

二、日中現代文学比較論

二-I 日中現代文学の相似性・相関性

王向遠は日本の現代文学の中国の現代文学に対する影響と役割を次の二つに帰納している。⁽¹⁾ 第一は「媒介の役割」で、“日本文坛是联系中国文学与西方文学的一个十分重要的“走廊”、渠道和媒介。”（「日本の文壇は中国文化と西方文学を関係づけるきわめて重要な「廊下」、道、そして媒介であった。」）と言え、その第二は「啓発の役割」で、それは“日本现代文学对中国文学的引发与启示作用。”（「日本の現代文学の中国文学に対する誘発と啓示の役割」）のことを指していると言う。妥当な見解であると言える。

欧米列強の侵略主義にさらされたとき、日本は美事なまでに「尊王」「攘夷」から「攘夷」を捨象し、「尊王」を西洋のキリスト教に匹敵する精神的支柱として近代化を推進していく。他方、中国の方は「異民族支配」「封建制」という足枷^{かせ}によって近代化は遅々として進まなかった。日本の近代化と歩みを共にして、日本の現代文学も「政治小説→写実主義・硯友社→浪漫主義・自然主義（主潮）→非自然主義（余裕派・白樺派・唯美派）→プロレタリア文学・新感覚派→全体主義戦争文学」⁽²⁾と変化をとげていく。そしてまた、現代中国文学も「政治小説→鴛鴦胡蝶派・写実主義→浪漫主義→左翼現実主義（主潮）→非左翼文学（新月派・現代評論派）→プロレタリア文学・新感覚派→抗戦文学」⁽³⁾と文芸流派の主流は変化をとげていく。近代化（＝西洋化）の進度の差は大きくても、こと文芸流派の主流の変化過程が非常に相似していることには注意する必要がある。そして、その主たる理由としては中国人の日本留学ブームがあったことが挙げられる。中国人留学生の第一陣が日本にやって来たのは1896年（日清戦争の翌年）のことであり、そのときはわずかに12名であったが、1901年には280名、1904年には1,300名以上、1905年—8,000名と増加していき、その日本留学ブームは1937年の日本の中国への全面的侵略戦争の開始まで続いた。1936年6月1日当時の在日中国人留学生は5,834人であったが、戦争開始後、皆、中国に帰国している。1896年から1937年までの間に中国人の日本留学生の数は合計61,230人に達し、その中で学校を卒業した者は11,817名であった。⁽⁴⁾

彼ら中国人留学生が日本に留学した目的は「明治維新後の日本に学ぶ」と同時に、「日本を通じて西洋文明を祖国に紹介する」ことであった。⁽⁵⁾ こうした背景が存在するのであ

るから当然、文芸流派のうちの何が主流になるかといった点でも相似、相関性が出てくるのは想像に難くない。たとえば、日本の自由民権運動の産物である政治小説は、梁啓超によってクローズアップされ（政治小説と政治の関係を顛倒した形の理解となってしまったが）中国で政治小説がブームとなった。また、政治小説への反発として起こった硯友社の運動と同じように中国でも鴛鴦胡蝶派の作品が流行している。更に、日本のロマン主義の流行は中国のロマン主義の隆盛に大きな影響を与えていると言える。前後するが写実主義についても同様のことが言えるであろう。

日本と中国の現代文学にはそうした相似性、相関性が見られるのであるが、そのことについてはまた、後に詳述していきたい。ここで注意しておきたいのはそうした相似性、相関性は「西洋の衝撃」（“Western Impact”）、「西洋の圧力」によって生じたものであり、日本の現代文学のその時の主流派を中国の現代文学が時に完全に模倣しようとし、時に取捨選択するという形で進行していったということである。ある意味でそれは「押しつけられた」ことから生まれた相似性、相関性である。「西洋の衝撃」は両国の過去の文学の伝統的観念を強引に断ち切ったとも言えるのである。とはいえ、それは表面上のことであり、現実には（より深層では）伝統的観念がそう簡単に消えてなくなるものでもないと言うこともできよう。次に、以上のような相似性、相関性についての理解のもとに両現代文学の各特徴について少しく考察してみたいと思う。

二－Ⅱ 日中現代文学の各特徴

日本の現代文学の主流は「超政治的」「超時代的」「反資本主義的」「個人的」であり、中国の現代文学の主流は「政治的」「時代的」「反封建的」「社会的、集团的」であると言う。⁽⁶⁾中でも、日本文学が「超政治的」「個人的」で、中国文学が「政治的」「社会的、集团的」であると言うのは当を得ていると思う。それは何も現代の日本文学、中国文学についてそうであるだけでなく、伝統的にそうなのである。たとえば、日本文学に「超政治的」特徴が顕著なこと、中国文学が「政治的」なことは先学の次のような言によっても窺い知れる。

中国では伝統的に、望ましい文学の姿勢、あるべき文学の発言は、政治の問題についても回避することなく、関与すべきであるとする傾向が強い。それに対して日本の文学世界では、「もののあわれ」の風情こそがたいせつで、文学に政治をからませるとやばいになるとする傾向が強い。⁽⁷⁾

また、文学を支えた階層にもちがいがあり、中国では士丈夫階層（官僚知識人）であったのに対して、日本で文学を支えたのは政治的にアウトサイダーである宮廷女性や法師、隠遁者、市民であった。⁽⁸⁾あの「雪国」が書かれたのは1935年から1947年の間であり、その間に日中全面戦争が開始し、日本が敗戦するのであるが、そうした「時代」は「雪国」の中に影として、臭いとしてすら微塵も感じられない。それに対し、中国ではすぐれた文学者はすぐれた政治家であるのが理想である（その逆もまたそうである）とする考えが根強く存在し、政治と文学は一体の感すらある。今においてもそうであり、21世紀初頭の時点でも、5月17日から24日まで安徽省を視察した国家主席（当時）江沢民は黄山に登り、次のような七言絶句を詠んでいる。

遥望天都倚客松	遥かに天都を望み客松に倚る
蓮花始信两飛峰	蓮花はじめて信ず两飛峰
且持夢筆書奇景	且つ夢筆を持ち奇景を書す
日破雲涛万里紅	日、雲涛を破りて万里紅なり

江沢民 辛巳四月廿七于黄山⁽⁹⁾

辛巳四月廿七、黄山にて

日本で首相がどこかの地方を視察した際に詩（俳句でもよい）を詠むことがあるであろうか。江沢民が詩を詠むのは暗に自分は優れた政治家であると同時に、優れた文学者の側面も持っている「理想的」人物なのだとほのめかしているのである。

日本文学が「個人的」で中国文学が「社会的、集团的」であるというのも日本文学が女流文学を主流として始まったことや、中国には“文以載道”（「文以て道を載す」）という“載道主義”（「人としての道や理想、かくあるべしとする手本を載せる主義」）が文学の根底にあることに起因するのであろう。現代中国における語絲派と現代評論派、創造社系作家等の文学集団の闘争はつとに有名であるが、マルクス主義の受容をめぐる文学者が社会・政治に積極的にかかわっていくのは、日本文学から見ると奇異にすら見える。

こうした現代の（場合によっては伝統的な）中国文学と日本文学の差異、特徴が根底にあった上で、「西洋の衝撃」「西洋の圧力」によって両国が「近代化」を余儀なくされていく。そしてその中で、つまり日本への中国人留学生が増大する中で、また日本人（日本書籍）との交流の中で、既述の相似性、相関性が出てくるのであるが、表面的には伝統を断ち切ったように見えても、両文学の根底に存在する差異がそれぞれの特徴を変形した形で出てくる、そこに現代の中国文学と日本文学のリアルな姿があると考えるのである。具体

例を一つ挙げて言えば、日本ではロマン主義の文学思潮のあとに自然主義という思潮が一時、主流となる。しかし、中国では自然主義は全くと言っていいほど不調で、相手にされない。日本で主流になったと言っても中国で必ずしも主流とはならないのである。自然主義が両国でどうしてそのように扱われ方が違うものになったのかということは各論で詳述したいが、それは「個人的」な文学をどう評価するかということと深くかかわっている。以上のようなことを前提にした上で以下、各論に移ることにする。

二-III 日中現代文学思潮の比較

1868年の明治維新をもって日本の近代の始まりとするのが通説である。(なお、本稿では現代文学というとき日本のものであれ、中国のものであれ、明治維新以降 1945年の日本の敗戦ぐらいまでの文学を広く指して言うものであることを付言しておく。) その近代は強いられたものであり、当時の日本人は進取の気性に富むとともに欧米列強の殖民地となることへの恐怖心も抱いていたことであろう。近代化＝西洋化は至上命令であった。文学も江戸時代の戯作文学のような暇つぶしの文学ではすまされなくなった。西洋の進んだ文学を翻訳し、紹介することから新しい日本文学が開花していった。その中で啓蒙主義の文学思潮が主流となり、政治小説がクローズアップされてきた。

二-III-1 啓蒙主義

ここに言う啓蒙主義とは具体的には政治小説として現れたもののことを指す。明治時代初期の政治と小説の関係について有名な逸話がある。1882(明治15)年に自由党の総理である板垣退助がヴィクトル・ユゴーに会った際に、日本で自由民権思想を広げるにはどうしたらいいかと問うと、ユゴーは国民に政治小説を読ませるのがよいと勧め、板垣はいたく感動したと言う。⁽¹⁰⁾ 1870年代から1880年代にかけては西洋からの輸入文学の刺激があった。また、日本の中からも政治小説の基盤となる政治思想が盛んになっていった。その両者が相まって士族インテリを政治小説に向かわせる起動力となったと言える。

ここで注意しておく必要があるのは政治小説は自由民権思想等の政治思想を広げるための宣伝手段として考えられていたのであって、政治小説が政治を変えたのではないということである。日本人はそれほど小説の力を信じていなかった。日本人の小説観にはどこか江戸時代の戯作小説の「暇つぶし」的小説観が濃厚であった。政治小説を宣伝手段と言ったが、明治政府は当時、新聞、出版に対して弾圧を加えており、日本の政界を舞台にすることも、フランス革命に取材することも弾圧を招くおそれがあった。そこで代表的政治小説家、矢野龍溪は当局の検閲の目を晦^{くら}ますために題材を古代ギリシアのアテネ隣邦の一小

国テーベに求め、その興隆の歴史を借りて、自由民権思想の煽動を計ったのであった。⁽¹¹⁾それが『経国美談』である。

龍溪は『経国美談』でその執筆意図についてこう書いている。

明治十五年春夏ノ交、予疾アリ。臥^{がじょく}蓐連旬、無聊ニ勝ヘズ。眼、史冊ニ倦ム。則チ和漢ノ小説ヲ求テ、之ヲ読ム。諸書脚色^{ちんとう}陳套、語氣卑下ニシテ、人意ニ満タザルヲ憾ム。後チ数日手ニ任セテ、枕上ノ書ヲ取り、之ヲ読ム。卷中会マ希臘^{タマタ}、齊武^{ギリシヤ}、勃興ノ事迹ヲ記ス。其事奇異、粉装ヲ加ヘズシテ、人ヲ悦バシムルニ足ル。因テ之ヲ訳述センコトヲ思フ。⁽¹²⁾

病床でひまつぶしに和漢の書を手にとってみたが、いずれも面白くなく、たまたま枕もとにあったギリシア、テーベの本を読むと面白かったので、その歴史を書いてみようと思った、と言うのである。

『経国美談』は大変な売れ行きで、龍溪はその印税で二年半にわたって欧米旅行ができたほどであったと言う。⁽¹³⁾『経国美談』の流行はそれまで卑しまれていた小説の地位を引き上げたが、それは小説が庶民大衆に対する絶大な啓蒙効果を発揮しうる可能性を持っていることに人々が気付いたからであった。『経国美談』の成功に続いて柴四郎の『佳人之奇遇』が代表的政治小説として表れる。『佳人之奇遇』の瞠目すべき点は書中の散士の世界のあらゆる人民との強い連帯感⁽¹⁴⁾であろうが文体的な面に注目すればその書が「漢文」調で書かれていたことから、中国語訳の話が出たとき、ほとんど日本語を知らなかった梁啓超がそれを短時日のうちに成しとげた⁽¹⁵⁾ということがある。たとえば『佳人之奇遇』の原文で「晚霞丘ハ慕士頓府東北一里外ニ在リ左ハ海灣ヲ控エ右ハ群丘ニ接シ形勢巍然實ニ咽喉ノ要地ナリ」とあるところは梁啓超訳では次のようになっている。“晚霞邱在慕士頓府東北一里外，左控海灣，右接群邱，形勢巍然，実咽喉之要地”もっともこうしたこと（＝直訳）は訓読調の日本語を中国語（それも書きことばとしての）に訳すときに有効なだけである。梁啓超は後に、日本文を読めるだけでよければ数日で一応出来、数ヶ月あれば十分である、などと言っているが⁽¹⁶⁾、それは訓読調の日本語に限っての話であり、日清戦争後、漢詩文が日本人の教養から欠落していったことを考えれば⁽¹⁷⁾、^{びょう}謬見と言わざるをえないであろう。

梁啓超と言えば、もう一つ指摘しなければならないことがある。それは、日本の政治小説と日本の政治の関係を顛倒し、前者が後者を推動したと考えたことである。⁽¹⁸⁾梁啓超は《小説与群治之关系》の中で次のように言う。“欲新一国之民，不可不先新一国之小说。

故欲新道德，必新小说；欲新宗教，必新小说；欲新政治，必新小说；欲新风俗，必新小说；欲新学艺，必新小说；乃至欲新人心、欲新人格，必新小说”また、“中国群治腐败之根源”はすべて旧小説にあるとまで言っている。⁽¹⁹⁾つまりは、国民、道德、宗教、政治、風俗、学芸、人心、人格を新しくしようとするなら、小説を新しくしなければならないと言うのである。こうした考えは日本から見ると奇異に感じられるのである。ここに日本と中国の現代文学の相違を見い出すのは私一人ではないであろう。王向遠氏は中国文学について次のように言う。“在中国，启蒙主义者顺乎其然地把传统文学中的“文以载道”转换为“以小说载道”、又把传统的封建之旧“道”转换成近代私产阶级启蒙思想之新“道”。”⁽²⁰⁾（「中国では啓蒙主義者は伝統文学の「文以載道」を「以小説載道」に変え、また、伝統的な封建的旧「道德」を近代資産階級の啓蒙思想の新しい「道」に変えたのである。」）中国では「道を載せる」ものが以前は「文」であったが、今ではそれが「小説」になっただけであると言うのである。

また、梁啓超が“日本の変法，頼俚歌与小说之力”“于日本維新之有大功者，小说亦其一端也。”⁽²¹⁾と言ひ、政治変革における（政治）小説の力、効用を強調するのは、それだけ「文」や「小説」の力を信じているということであろう。他方、日本の政治小説の作者は主として「小説に自分の政治の理想を寄せ、併せて暇をつぶした。政治小説は一定の政治宣伝作用を果たしたが、主観的意図はすべて文を以て政に従うものとも言えず、江戸時代以来の市井文学の戯作小説、人情小説の伝統を継いでいる」⁽²²⁾と言うのは妥当な見方であろう。日本から中国を見ると、その小説観は堅苦しく見えるし、中国から日本を見ると、その小説観には“消閑”（「ひまつぶし」）の匂いがあり、納得のいかないものがあるのではないかと考える。日本の影響で書かれるようになった中国の政治小説には、梁啓超の《新中国未来記》や陳天華の《獅子吼》、魯迅の早期の《斯巴達之魂》などがあるが、創作数でははるかに日本に及ばなかった。その理由は純粋な「政治小説」が書きにくいことに由来するのかもしれないと王向遠氏は言う。⁽²³⁾

二-III-2 早期写実主義

政治小説の代表作の一つ『経国美談』が書かれた1885年には『繫思談』^{けいしだん}と『小説神髓』も世に出ている。前者は西欧文学の翻訳の佳作であり、後者は早期写実主義の代表的文学論であった。1880年代の日本には上記三つが混在していたと言える。⁽²⁴⁾ここでは早期写実主義の代表的文化論『小説神髓』の内容を考察し、中国現代文学とその那边が同じで奈辺が異なるかについて見ていきたいと思う。

『小説神髓』の本文は、まず最初に小説を美術として規定し、小説の目的は、道德を教

えることではなく、読者を高遠で善美な境地に達せしむることにあるとする。また、ハーバート・スペンサーの進化論の影響が見られ、日本の詩歌では「このごろの人情」を「述尽す」ことは無理であるとし⁽²⁵⁾、むしろ小説の方を重視する。

『小説神髓』の中で最も重要な個所は「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」という言葉で始まる「小説の主眼」の章である。続けて言う。「人情とは人間の情欲にて、所謂百八煩惱是れなり。それ人間は情欲の動物なるから、いかなる賢人、善者なりとて未だ情欲を有ぬは稀れなり。」「斯れば人間といふ動物には、外に現る外部の行為と、内に藏れたる内部の思想と、二條の現象あるべき筈なり。しかして内外雙つながら其現象は駁雜にて、面の如くに異なるものから、世に歴史あり傳記ありて、外に見えたる行為の如きは、概ねこれを寫すといへども、内部に包める思想の如きはくだくだしきに渉るをもて、寫し得たるは曾て稀れなり。此人情の奥を穿ちて、所謂賢人、君子はさらなり老若男女、善悪正邪の心のうちの内幕をば洩す所なく描きいだして周密精倒、人情をば灼然として見えしむるを我が小説家の務めとはするなり。よしや人情を寫せばとて、其皮相のみを寫したるものは、いまだ之れを眞の小説とはいふべからず。其神髓を穿つに及びてはじめて小説の小説たるを見るなり。」「⁽²⁶⁾小説の主眼は「情欲」＝心情を描くことにあり、その「内部の思想」「心のうちの内幕」を描きいだして、「人情」を「灼然と見えしむる」のが「小説家の務め」であるとするのである。

こうした心情描写の小説観は中国においても同じく主張されている。たとえば陳独秀が《儒林外史新叙》（1920）で“只应该作善写人情的小说，不应该作善写故事的小说。”（「人情を上手に書く小説を作るべきであり、物語を上手に書く小説は作るべきではない。」）と考え、周作人が《人的文学》で文学は“个人的感情”（「個人の感情」）を表現すべきであると述べているのと軌を一にする。⁽²⁷⁾

以上のような小説が「情欲」＝「心情」の描写をすべきであるという点では日本の現代文学も中国の現代文学も同じ考えに立つようであるが、次の「勸善懲惡」についての考えには日中の現代文学間では大きな隔たりが存在するようである。

『小説神髓』は「勸善懲惡」について次のように言う。「文化、文政の比よりして、我が國俗のもてはやせる小説、稗史は概してみな此種の勸懲小説にて、眞の小説にはあらざるなり。」「⁽²⁸⁾「試みに一例をあげていはん歟、彼の曲亭の傑作なりける『八犬傳』の中の八士の如きは、仁義^{はっこう}八行の化物にて、決して人間とはいひ難かり。」「⁽²⁹⁾ 勸善懲惡小説を『小説神髓』が批判するのは、その登場人物が「決して人間とはいひ難」いほど完璧すぎるからである。続けて言う。「蓋し八犬士は曲亭馬琴が理想上^{あい で やる}の人物にて、現世の人間の寫眞にあらねば、此不都合もありけるなり。さはあれ馬琴の凡ならざる、よく巧妙の意匠をも

てして、其牽強をば掩ひしかば、讀者は毫もこれをしらず、よく人情をも穿ちたりとほめ稱へたるは誤りならずや。」⁽³⁰⁾ 勸善懲惡小説に出てくる、たとえば馬琴の八犬士などの「理想上の人物」は「現世の人間の寫眞」でないからだめであると言うのである。つまりは現実ばなれしていること＝客観的描写でないことが批判の理由となっているのである。事実、『小説神髓』は非功利的客観主義を採って次のように言う。「されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて、我が假作りたる人物なりとも、一度篇中にいでたる以上は之れを活世界の人と見做して、其感情を寫しだすに、敢ておのれの意匠をもて善惡邪正の情感を作り設くることをばなさず、只傍觀してありのままに模寫する心得にてあるべきなり。」⁽³¹⁾ 「只傍觀してありのままに模寫する心得」とは非功利的客観主義のことを指している。「ありのまま」とは「なる」を重んじる日本人的エトスの匂いがする。価値判断を加えずに、現実の姿をそのまま描写していくのがよいとする考えである。結果、野放図な刺激の強いものを求め続けることになっていく危険性も容認するエトスである。

他方、現代中国文学は社会の改造、国民精神の改造を目的としたのであり、中国の写実主義も「文以載道」の伝統文学観念にははっきりと反対したが、彼らが反対したのは、伝統文学の封建的「道」であり、載道の役割自体に反対しているのではなかった。⁽³²⁾

『小説神髓』は小説の種類をその目的によって勸懲小説と模写小説に分ける。前者は世を諷諭しようとするもので、更に読者を善導せんとするもの（たとえば馬琴の作品）と人間の「醜行の恥べきを描きてもて訓誡せんとつとむる者」に分けられる。⁽³³⁾ 後者は「リアリスチック・ノベル」であり、『小説神髓』はそれを推す。現代中国文学の場合は『小説神髓』の言う勸懲小説を批判、排斥しているわけではなく、事実、魯迅の《彷徨》の諸作品などには「醜行の恥べきを描きてもて訓誡せんとつとむる者」が多く見受けられる。

現代中国文学と日本の現代文学の早期写実主義上の相違点として挙げておかないといけないのは、前者の鴛鴦胡蝶派との関係と後者の硯友社との関係の相違である。中国の写実主義者（たとえば沈雁冰）は“游戲消閑”（「遊戯消閑」）の文学たる鴛鴦胡蝶派を徹底して批判、排斥した。⁽³⁴⁾ 一方、硯友社は文学の功利性を否定し（したがって政治小説を蔑み）、江戸趣味をその特徴としたが、自らは坪内逍遙の写実主義の主張を受け入れたものであると主張した。⁽³⁵⁾ こうした現象が生じたことについて、王向遠氏はこう言う。日本の写実主義は根本から伝統を否定しておらず、それは改良主義の写実主義であり、逍遙が馬琴の作品を否定したのは、馬琴が“以文載道”＝文を以て道を載せ、真実性を失ったからであり、馬琴の作品で宣揚されている孝悌忠信仁義礼智等の封建道徳自体は否定していない。坪内逍遙は作品の描写技巧と思想内容を完全に分けたのであり、この角度から見ると、坪内逍遙の写実主義は形式主義の写実主義であった⁽³⁶⁾と。現代中国的な解釈であるが、事実、坪

内逍遥が元来、少年時代に戯作に親しみ、勸善懲惡の信奉者であったことを考えればこうした解釈も首肯できないわけではない。その馬琴の作品に対する批判も客観主義の描写でないことがその主な理由である。しかし、硯友社の側が写実主義を自らの側のものと見なした理由として、日本文学では内容的に文学とは「ひまつぶし」の面、そして「精神の自由」＝「何を書くかは作者の自由」という面を持つものだという共通理解が文学者の間に存在したからではないかと考えられる。少なくとも坪内逍遥と硯友社の間には中国の写実主義者と鴛鴦胡蝶派の間に見られるような排斥関係は見られないのである。重複するが、研友社にとって写実主義という形式を採りながら江戸趣味という戯作的傾向の内容を持つことは何ら矛盾を感じることはなかったが、それは内容についての規制（たとえば中国の場合には“游戲消閑”はだめで「載道主義」でなければならないといったもの）が中国に比べてかなりゆるやかであった（場合によっては野放図で規制などなかった）ためではないかと考えるのである。

中国では、まず“基本”（多くは政治）がすべてを支配する。その上で他の自由がある。日本ではモザイク的に同時進行的にさまざまなものが併存する。それを「あいまい」と見るか「多様性」と見るかは見る人の主観性、価値観に委ねられる。

二-III-3 ロマン主義

二-III-3-1 日本のロマン主義

日本のロマン主義は1889（明治22）年ごろから1904（明治37）年ごろまで続いたが、それは前の早期写実主義が西洋文学を模範又は規準として芸術性を強調するとともに、非功利的客観主義の小説観を確立しようとしたのに対して、西洋文学の中に培われてきた「宗教的、哲学的、あるいはヒューマニスチックな思想」⁽³⁷⁾に目を向ける中から生まれてきたものであった。西洋文学、西洋文化の根底にキリスト教が存在することは今ではもはや自明の事であるが、日本のロマン主義の代表者の一人である北村透谷もキリスト教に傾倒していった。また、北村透谷は『文学界』とともに、「恋愛は人生の秘鑰なり」⁽³⁸⁾（筆者注：「恋愛は人生の秘密の鍵である」という意味）という言葉、その恋愛至上主義で名を知られているが、そうした恋愛至上主義もキリスト教を媒介とした個人の尊重、重視という考えと密接に関係があるものと言えよう。

初期の日本のロマン主義を育てた森鷗外の舞姫三部作や『即興詩人』も恋愛、または悲恋の物語であったし、与謝野晶子に至っては恋愛至上主義の実践者であった。そして、いずれも個人の尊重、重視をその基本とするものであった。北村透谷の『厭世詩家と女性』（1892年）の先の「恋愛は人生の秘鑰なり」という個所を読んだときの衝撃を木下尚江は

次のように記している。「この様に真剣に恋愛に打込んだ言葉は我国最初のものと思ふ。それまでは恋愛—男女間のことはなにか汚いものの様に思はれてゐた。それをこれほど明快に喝破し去ったものはなかった」⁽³⁹⁾

ロマン主義的作品に発表の場を与えた雑誌としては『文学界』以外に、キリスト教の影響のもとに個人主義と平等主義を標榜した『国民之友』(徳富蘇峰創刊)や『帝国文学』『太陽』などがあるが在日中国人留学生もそれらを手に取ってみたことであろう。

新国家が基礎を固め、天皇を精神的支柱として更に拡大、膨張し、他国を侵略していこうとする時期に日本のロマン主義は個人の尊重、重視を中心的精神とし、拡大、膨張していこうとした。やがてそれは挫折していくのであるが、従来、汚物視されていた恋愛を前面に引き出した意義は大きい。もっとも、その挫折は個人の尊重、重視によって自由を得た「自我」を苦しめていくことになるのであるが。(続く)

〔注〕

- (1) 王向遠 (1998) pp. 3-5
- (2) 同 (1) 書 p. 5
- (3) 同 (2)
- (4) 陳生保 (1996) pp. 209-210
- (5) 同 (4) 書 pp. 211-212
- (6) 同 (1) 書 p. 15
- (7) 鈴木修次 (昭53) p. 18
- (8) 同 (7) 書 p. 43
- (9) 毎日中国ニュース 〈chinanews@excite.co.jp china news: 401〉 2001. 5. 30 15:22 受信
- (10) 柳田泉 (1935) pp. 145-146
- (11) ドナルド・キーン著 徳岡孝夫訳 (1995) p. 136
- (12) 小林智賀平校訂 (1969) p. 35
- (13) 同 (11) 書 p. 139
- (14) 同 (11) 書 pp. 150-151
- (15) 同 (11) 書 p. 150
- (16) 同 (4) 書 p. 210
- (17) 同 (11) 書 p. 19
- (18) 同 (1) 書 p. 24
- (19) 同 (1) 書 p. 25
- (20) 同 (1) 書 p. 27
- (21) 同 (1) 書 p. 23
- (22) 同 (1) 書 p. 28

“日本の政治小説作者主要是以小说寄托自己的政理想，并兼以消闲自娱。其政治小说固然在客

観上起到了一定的政治宣传作用，但主观意图并不全在以文从政，因而也较明显地继承了江戸时代以来市井文学中的游戏小说、人情小说的某些传统。”

- (23) 同(1)書 p. 31
- (24) 同(11)書 pp. 167—168
- (25) 同(11)書 p. 178
- (26) 坪内逍遙(1988) pp. 58—60
- (27) 同(1)書 p. 38
- (28) 同(26)書 p. 48
- (29) 同(26)書 pp. 60—61
- (30) 同(26)書 p. 61
- (31) 同(26)書 pp. 61—62
- (32) 同(1)書 p. 40
- (33) 同(11)書 p. 182
- (34) 同(1)書 p. 40
- (35) 同(1)書 p. 40
- (36) 同(1)書 pp. 40—41
- (37) 同(11)書 p. 262
- (38) 勝本清一郎(1950—55) p. 254
- (39) 木下尚江「福澤諭吉と北村透谷」小田切秀雄編(1967) p. 383

《引用・参考文献》

- (1) 王向遠(1998)『中日現代文学比較論』湖南教育出版社
- (2) 王向遠(2001)『二十世紀中国的日本翻譯文学史』北京師範大学出版社
- (3) 陳生保(1996)「中国語の中の日本語」(皮細庚主編(2000)『日本学研究論文集』上海外語教育出版社所収)
- (4) 鈴木修次(昭53)『中国文学と日本文学』東京書籍
- (5) 柳田泉(1935)『政治小説研究』上巻 春秋社
- (6) ドナルド・キーン著 徳岡孝夫訳(1995)『日本文学の歴史⑩近代・現代篇1』中央公論社
- (7) 小林智賀平校訂(1969)『経国美談』岩波文庫 岩波書店 上巻
- (8) 坪内逍遙(1988)『小説神髓』岩波文庫 岩波書店
- (9) 勝本清一郎編(1950—55)『透谷全集』第一巻 岩波書店
- (10) 木下尚江「福澤諭吉と北村透谷」(小田切秀雄編(1967)『北村透谷集』〈明治文学全集29〉筑摩書房所収)
- (11) 鈴木貞美(1996)『生命で読む日本近代』日本放送出版協会